

話しことば教育の現状と課題 (3)

小 沼 俊 男

Some Aspects to Improve in the Present-Day Speech Education in Japan (3)

Toshio KONUMA

はじめに

新しい学習指導要領では、これまで国語科を中心に行われてきた「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」など言語活動能力の育成を、全教科の課題として位置づけた。言語能力の育成は、その基礎を国語科で行い、具体的な展開は各教科のなかで進めるという、まさに全教師が総力をあげ、より質の高い指導を目指すことが期待できる改訂である。

このような言語活動能力重視の背景には、子どもたちを取り巻く社会状況の変化によるところが大きい。インターネットの急速な普及に象徴される多メディア時代の到来は、手紙、電話、FAX など従来の情報伝達手段から、電子技術の開発により、情報量や内容は、これまでとは全く異なり、膨大で複雑化している。国境の壁も取り払われ、まさに地球規模での情報のやりとりが可能になったのである。

ところが、ビジネス社会や教育界の人たちのなかには、こういった情報メディアの目まぐるしい動きとスピードに、戸惑いや不安を抱く人が多い。発想がアナログからデジタルに切り替えられず、事態を傍観しているのである。ビジネス社会では、いま、こうした変革に柔軟に対応していなければ事業拡大には限界があるという危機感のもとに、発想力やその発想を事業

に結びつける実行力のある人材の育成に力を入れている。いまビジネス社会で最も重視される言語活動能力は、企画・立案に当たって、相手の情報を収集する能力、説得性のある根拠を携えた提案力、目標達成までの道筋を事実と意見を区分けして論理的に説明・報告する力、プレゼンテーション能力、相手の疑問や意見に柔軟に対応できるコミュニケーション能力などである。さらに、最も高い精度で要求されるのが、情報をリアルタイムで正確に伝えられる能力とそれを可能とするすばやい判断力なのである。

ところが、このような学習の経験が少ない日本人は、日常の社会生活の中で、コミュニケーションギャップを引き起こす。日本人同士でも脆弱な言語力では、より言語環境が複雑になる海外や、国内でも外国人を相手に進めるビジネスの場面で、的確な言語表現を駆使することは難しい。

このような状況から、企業の新規採用者に求める言語能力のレベルも年々高くなっている。採用試験で学生をみる項目は、従来の協調性やリーダーシップなどコミュニケーション能力に加えて、問題解決能力を重視するところが増えている。学生生活の場で遭遇したさまざまな問題にどのように対処したのかを聞き出し、思考力・判断力、問題解決能力を測定する。

こうしたビジネス社会が求める言語活動能力と、学生の話し力を比較すると、そのギャップは

大きい。

I. 言語活動能力向上を目指す支援のあり方

一般的な傾向として学生は、人前で話すことへの抵抗感をもっている。パブリックな場面で話すことに躊躇し、私的な場に逃避する。

プライベートトークは、察しの会話で終始する。

現代社会におけるコミュニケーションギャップの原因は、「話の組み立てが悪い」「音のことばとして考えていない」「相手のニーズ・ウォンツをとらえていない」「曖昧表現が多い」「声が小さい、発音が不明瞭」「聞き取りにくい速さ・間」などが問題視されている。私的な会話の域を出ていないのである。

このような実態の解消を新学習指導要領の指針に沿って考えるなら、言語力の基礎から言語活動能力育成までの指導と支援を組み合わせた取り組みを、国語教科だけでなく、すべての教科・領域を通して、入学から卒業までの期間、継続して行うことの検討が必要である。しかし、教育現場の動きは弱い。むしろ、学力向上を当面の課題とし、どちらかと言うとペーパーテスト対策に集中し、そこまで手が回らないという状況すら感じる。

言語活動能力の育成は、情報提供と情報収集についての学習からはじめる。何れも、相手の立場を意識した取り組みが必要であり、一方通行ではなく、双方向コミュニケーションを念頭におく。情報提供は、論理的に表現することを課題とする。相手の立場に立ってわかりやすく伝える組み立ての基本の習得からはじめ、説明・報告・プレゼンテーション・スピーチの実践を行う。また情報収集は、相手の話の要点を聞きとること (listen)、相手から話を聞き出す学習 (ask) をする。こうした基礎学習を経て、応用としての問題解決型の学習に取り組む。課題設定・学習計画の作成・調べる方法を決め、資料収集を行う・収集した資料をまとめ発表するという一連の学習の流れを体験する。

小・中学校の教育課程では、総合的な学習の時間なかで調べ学習として行われているが、今後は、大学教育も含めて、活用型、探求型など、問題解決型学習を全ての教科で実践できる学習環境を整備する必要がある。

この指導・支援に当たる教師は、教育内容として充実している「書くこと」と同じように、音声言語としての「話すこと」「聞くこと」「読むこと」の手法を開発し実践に移さなければならない。本稿では、新学習指導要領に位置づけられた言語活動能力の育成を進めるために、論理表現の基礎教育から問題解決型学習を通しての教師の指導・支援のあり方について考察する。

II. 論理表現を身につけるための基本的な考え方

ビジネス社会が求める言語力に役立てていくためには、論理的に表現する力の育成が緊急の課題となる。指導は、各教科の学習の目的・内容に応じて、できる範囲内で進めることを前提とするが、論理表現育成の基本的な考え方は共通する。「説明」「報告」「プレゼンテーション」「スピーチ」の場合には、まず、目的や場の条件を考える。「何のために話すのか」(目的)、「どんな場で」「誰に」「どんな立場で」「何を」話すのかを明確にする手順を踏む。また、話の組み立ては、次のように、話の内容によって、事実と話し手の意見を区分けする。

説明

事実をありのままに的確に表現し、話し手と聞き手の間に過不足ない情報交換をする。

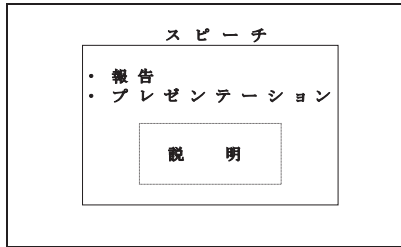
報告・プレゼンテーション

説明要素に加えて話し手の視点主張という情報への付加価値をつける。

スピーチ

それに加えて話し手の人間像全体をことばとして伝えるもの。論理的な話の筋や説明に加え、非論理的な情緒情感の伝わる表現が許される。

上記の考え方を図にすると次のようになる。



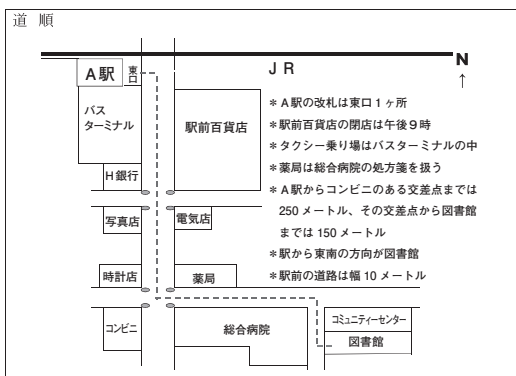
一般的には、この要素が混然一体となり聞き手の理解を妨げている。事実と意見を区分けした整理をすることによって、話者が伝えたいことが明確になり、聞き手にわかる表現になる。

Ⅲ. 論理表現育成の基本から応用への道筋

論理表現能力育成の導入は、音のことばとしてわかりやすく伝えることの学習からはじめる。話しことばは話すその瞬間から消える。聞き手は、話し手の話す順序でしか内容を耳にすることができない。何を話すのか「話の全体像」、内容によっては「結論」から話すことが基本となる。その理解を深めるために「道順の説明」を課題に実践する。

1. 道順の説明

課題は「A 駅から図書館までの道順を電話で説明する」という内容である。説明してもらう実践者 1 名を決め、あらかじめ次の図の情報を把握してもらい説明に入る。



実践者の説明は「A 駅を降りると、すぐバスターミナルがあって、道路をはさんで駅前百貨店があり、駅前百貨店の閉店は午後 9 時になっていて、道路をそのまま行くと、交差点があって、左側には H 銀行と写真店、右側には電気店があって…」と地図に記載されている情報を順番に伝えはじめる。

ここまでの説明では、論理表現の基本となる全体像（結論）がない。また、必要な情報と不必要な情報の選択ができていない。目標を説明する位置が聞き手と逆になっている。文長が長いなど、話しことばとしての条件が満たされていない。

聞き手の立場に立った場合、どのような情報から伝えたら、聞き手にとって最もわかりやすい話し方になるのかを考えることが、学習のはじまりである。

聞き手の立場に立つという考え方は、情報提供の原則であり、なおかつ、あらゆる場面で貫かなければならない原理でもある。

情報提供は、常に、何を伝えるのか、何を言いたいのかの全体像・結論から入る。道順の説明の場合でも、聞き手がはじめに聞きたい情報は、バスターミナルや駅前百貨店の位置ではなく、駅から図書館までの時間、距離、方向である。話しことばでは、これが全体像（結論）である。

この道順の課題をさまざまな場で実践するが、年代を問わず、99%「駅を降りて右にずると行くと」と部分の説明から入る。全体像（結論）は最後になるか、触れない場合もある。

日本人は結論が後回しと批判されるのも、聞き手の立場で話を組み立てる経験が少ないからである。また、部分の説明では、目標や交差点までの距離、自分の立つ位置をはっきりさせること、必要情報を順序良く説明すること。さらに話し方として、文長を短くして、音のことばとしての聞きやすさなどを学習する。

道順の説明課題は、言語活動能力育成の導入としては、話しことばの組み立てに必要な要素が組み込まれているために、広く活用されている。

2. 実践「自己紹介」

この課題の主旨は、話す場、立場、話す目的を意識して印象に残る自己紹介をするというものである。ここでも、冒頭で、「何を」話すのか、ひとことのキーワードが話し手の印象を決める。

実践者のスピーチがはじまる。

「私は、小学校時代から横笛が好きになり、中学校に入ってからフルートをはじめ、高校時代には、全国吹奏楽コンクールで金賞をとり、大学入学後ウィーンに留学し、帰国後全国音楽コンクールフルート部門で優勝した…」と話が進む。ここまでのところでは、コンクールで優勝したのは実践者自身であると皆思う。ところが「帰国後全国音楽コンクールフルート部門で優勝した先輩からフルートの指導を受けています。」と話した。ここにきてはじめて、フルートの達人が先輩であることがわかる。この実践例は「主語」と「述語」が遠く離れ、挿入句が長いために、話の経過のなかで聞き手の誤解をまねいた。この場合には、主語と述語を隣り合わせにして「何が」「どうした」の話体構造にする。冒頭で、「私は、先輩からフルートの指導を受けている」ことを伝え、次に「その先輩は～」という組み立てを考える。

道順でも、自己紹介でも、ヒントが与えられれば、すぐわかる話の組み立てができる。また、道順の説明と同じように、実践者の話し方は、文章で言うと同様に、句点がなく、センテンスが長い。項目に分け小見出しをつけて話すトレーニングを積み重ねると、だれが聞いてもわかりやすく、聞きやすい音のことばになっていく。

言語活動能力を育てることは、決して難しいことではないが、育成のためのプログラムを持っていなければならない。

話す場や目的に応じて、話が組み立てられるように、さまざまな事例が実践できる場をつくること。話すことの基礎から、徐々に難易度を高めていくカリキュラム、発達段階に応じた教材の開発が求められる。

NHK-CTI 日本語センターで、話しことば教

育の入り口として活用しているものでは、道順とともに図形を説明する課題がある。

これは、図形を見せないで、言葉だけの説明で、聞き手が同じ図形を書くことができるかどうかをゲーム感覚で行う。全体像がないと、説明した通りの図形にならないことを体験する。また、学校行事や図書館で行うイベントのスケジュール表を説明する課題でも、聞き手がメモを取りやすいように、全体像から部分への組み立てを考える。部分では、いくつかの情報を分野別、開催順に区分けし、小見出しをつけて説明する。課題はこうした手作りの図形や表の説明から文章題に入り、次第に内容を複雑にしていく。事実を客観的に伝える「説明」から、話し手の視点主張を組み込む「報告」「プレゼンテーション」、話し手の人間像全体をことばとして伝える「スピーチ」の各段階を踏んで論理表現を身につけられるように、実践を積み重ねていく。

IV. 言語活動能力育成支援の基本姿勢

～話しやすい環境づくり～

人前で話すときに躊躇することは、能力に関係なく、だれにでもある。原因は、言いたいことが言葉にならず、うまく言えない、とちる、笑われるなどの不安からくることが多い。人前で話をして、このような経験をすると、話すことに恐怖感を抱き、口数が少なくなってくる。

言語力を育成するときに注意しなければならないのは、話したことに対する評価の仕方である。実践を終えた話者の表現に対しては、否定ではなく、肯定する要素を多く取り入れることが求められる。

特に、筋道立てて話す課題を授業で行う場合、子どもの答えは、必ずしも必要条件を満たしているとは言えない。みんなで答えを出し合い、修正しながら課題を完成させるという考え方で、進める必要がある。

アメリカニューヨーク州ホワイトブレインズ市リッジウエイ小学校の話しことば教育の例をみると、この学校では、LANGUAGE ART(こ

とばの使い方)という科目の中で、人前で話すトレーニングを進めている。小学校に入学するとまもなく「話す」「聞く」の実践に入る。教育の基本は、つかえたり、失敗しても、安心して人前で話すことができるようにすることだ。

教師は、子どもの意見・主張をしっかり受け止めて、発言した子どもを高く評価する態度をとる。同小学校のローラ・ヘイビス先生は、人前で話すことは決してこわくない、誰からも攻撃されることはない、ということを理解させるのが目的だと言っている。

この考え方は、年代を問わず言語活動能力育成の基本になるものである。

V. コーチングマインドによる言語活動能力育成支援のあり方

別府大学では、平成19年度、20年度の2年間、調べ学習における「言語力とメディア活用能力の向上を目指す教師の支援のあり方」についての教師を対象としたDVD教材を制作した。これは独立行政法人教員研修センターの委嘱を受けて実施したものである。

教材は、問題解決型調べ学習の実践を通して生徒の主体性の確立と言語力の向上を図るための指導・支援の具体的な方策について明らかにしている。

本稿では、この教材の指導・支援とコーチングによる支援との共通点を探り、新しい指導・支援のあり方を考える。

その理由は、これまでの指導・支援が、個々の教師の経験則に基づいて行われているために、その取り組みは、教師によって異なり、濃淡もある。コーチングの手法を活用した取り組みは、指導者の共通理解のもとでの指導・支援が行われるため、教育内容を一定レベルに保つことができると考える。今回は、このコーチングの手法と、従来の経験則による指導・支援とを組み合わせたコーチングマインドによる言語活動能力育成を提起するものである。

生徒の主体性と言語活動能力の育成は、従来

の「教える」という一方通行型の教育から、生徒自身が考えて問題を解決していくことができるように教師側の教育方法を変え、双方向に比重を置いた教育環境をつくる必要がある。

そのためには、従来の指導と、後方から支援することとの区別を明確にしたなかで、生徒が考え、課題を深めていく過程を支援していく具体的な方法を考えなければならない。

双方向の関係のなかで重視したいことは、課題に取り組む生徒の意欲を導きだし持続させることである。教師とのコミュニケーションが活発で、生徒自身が主体的に生き生きと活動し、課題を解決していくことが理想である。このような環境をつくるための方法として考えられるのが、コーチング理論である。コーチングの手法は、教師の「問い」と「肯定的なストローク(生徒の存在、発言を認める行為)」の積み重ねを通して、生徒が考え、気づき、発想を豊かにしていく可能性を持っている。聞くことによって、生徒は、考えていることをことばにする。「聞く」―「話す」―「聞く」を繰り返す過程でテーマを掘り下げたり、新たな発見をする。

コーチングの理念は、「相手が本人の望む方向に向かって、本人の納得するやり方で進んでいくことを援助する技術」というとらえ方が一般的であるが、教育現場で活用する場合には、教育の目標に沿う教師の指導と合わせた支援として位置づける。指導すべきことと支援の区別を前提とし、生徒の状況によっては、情報提供(アドバイス)や指摘(フィードバック)も行う。基本は「聞く」と「肯定的なストローク」を中心とした教師側からのアプローチの組み立てがカギをにぎるものと考えられる。

コーチングは現在、主に企業や医療機関で人材育成の手法として取り入れられているほか、多くの教育機関でもコーチング活用のための研究を行っており、教員を対象としたコーチングによる教育実践が広がりつつある。私自身も、PHP認定ビジネスコーチの資格を取得する過程で、学生やビジネスマンなどさまざまなタイプのクライアントに対しコーチングを行い、そ

の効果を確認している。大分県教育センターでは、毎年高等学校の校長・教頭・事務長などを対象としたコーチング研修会を開催しており、私も講師として参加し一緒に学ぶなかで、若手教員や児童生徒が目標に向かって主体的に意欲を持って取り組む指導・支援のあり方についての理解を深めている。

1. コーチングマインドによる問題解決型学習支援の組み立て

コーチングマインドによる学習は、教師が計画した授業の進行に合わせて行う支援の方法である。本稿では、中学校で行った問題解決型調べ学習に沿ってコーチングの手法を当てはめ検証する。この手法は、特定の学習のためのものではなく、課題を自ら設定して取り組む問題解決型学習の支援すべてに普遍化できるものとして組み立てる。実践活動は、次の5つのステップで進めることを基本とする。

問題解決型学習のステップ

- (1) 課題を設定する。
疑問形の課題を自ら考える。
- (2) 学習計画を立てる。
研究計画書を作成し見通しを立てる。
- (3) 資料・情報の収集を行う。
- (4) 資料・情報を記録し、整理する。
- (5) 資料・情報をまとめ、発表する。

上記の学習のステップに対し、コーチングマインドによる指導・支援は、学習の各段階にGROWモデル等のスキルを学習目的に沿う内容にして活動支援を行う。

GROWは「育成する」という意味でもあるが、コーチングのポイントとする項目を示す要素の頭文字である。

本稿では、各項目の本来の意味を＝で示し、次に問題解決型学習を進める場合の内容を「学習」として表す。

GROW モデル

G→Goal (ゴール) = 目標を設定する。

「学習」：課題を設定する。

R→Reality (リアリティ) = 現実を把握する。

「学習」：現在の状況を明らかにする。

R→Resource (リソース) = 目標達成のために使える資源を発見する。

「学習」：課題を解決するために活用できる資源・方法を発見する。

O→Option (オプション) = 選択肢を創造する。

「学習」：課題を達成するまでの道筋を複数考える。

W→Will (ウイユ) =

「学習」：選択肢の中から最適なものを選び、実行計画を立て、それを実行する意志を確認する。

上記のGROWモデル1番目のGoal (ゴール)：課題を設定するでは、次のSMARTモデル (目標設定モデル) を使い課題設定をより明確にする。

SMART モデル (目標設定モデル)

S→Specific (スペシフィック)

= 具体的で肯定的な表現であること。

「学習」：何を調べるのか、何を言いたいのかを明確にする。テーマが曖昧にならないように焦点化する。

M→Measurable (メジャラブル)

= 実績が計測可能であること。

「学習」：どのような状態に達したときによしとするか、根拠を明確にする。

A→Attainable (アティナブル)

=到達可能なストレッチな目標であること。

学習 : 明らかにすることが到達可能でストレッチなレベルであること。

R→Relevant (レレヴァント)

=他との関連が適切であること。

学習 : 教育の目指す方向、授業のねらいに沿うものであること。

T→Time Phased (タイム フェイズドゥ)

学習 : 期限が明確であること。

2. コーチングマインドによる支援で心がけること

言語力を育成するための支援では、やらされているという受身の状態ではなく、課題にチャレンジする意欲を生み出す環境をつくることが求められる。

そのためには、指示・命令ではなく、生徒自身が考えるための問いを積み重ねるなかから、生徒が課題を掴み、進む道を見通し、活動する動機付けを各段階で行わなければならない。

また、教師自身が生徒の活動内容に強い関心を持ち、生徒の発言意欲を高める問いと肯定的ストロークを組み合わせた双方向コミュニケーションの時間をつくる。暗礁に乗り上げた子どもとは一緒に考える。必要に応じてアドバイスやフィードバックを行う。時には勇気づけメッセージを送り活動を前進させる。

このような支援を行う前提として教師は生徒との信頼関係を構築すること、そして、相手の言動をよく観察しながら、その場、状況に応じてコーチングを行うようにする。

次のGROWモデルの5つの項目についての質問例は、いずれも、生徒自身に考えさせるためのもので、教師の問いを受けて生徒がことばを生み出す。それを受け止める教師は、「肯定的ストローク」を心がける。このプロセスを通して言語力が磨かれる。言語活動能力の育成は、発表の場だけではなく、日常の学習活動のなかで発話能力を身につけられるようにする。

3. GROWモデル5段階の説明と質問例

GROWモデルは、ゴール・リアリティ・リソース・オプション・ウィルの5つのポイントを押さえる。「ゴール」では、子どもの興味、関心を探りながら、何を調べ、どのような結果をだすのか課題の到達点を明確にしていく。次の「リアリティ」では、現在おかれている生徒の状況を把握し、ゴールとのギャップを明らかにする。「リソース」では、そのギャップを埋めるために使えるものとして何があるかを具体的に掘り起こす。いわゆる資源を発見する。さらに「オプション」で、ゴールまでの道筋を複数考えだす選択肢の創造を行う。そして最後に「ウィル」で、創造した選択肢の中から課題達成に最も適したものを選んだり、優先順位をつけ実行計画をたてる。その強い意志を確認する。

(1) Goal (ゴール) : 課題を設定する質問例

- ①テーマを何にするか。
- ②いま一番調べてみたいと思うことは何か。
どんなことに興味があるか。
- ③不思議だな、なぜ? どうして? と疑問に思うことがあるか。
- ④解決しなければならない問題では、何があるか。
- ⑤どのような問題を、なぜ解決するのか。
- ⑥調べることによってどのようなことが明らかになるか。
- ⑦課題に取り組んでいま最も大切にしたいことは何か。
- ⑧問題を解決して発表したとき、どんな成果が期待できるか。
- ⑨発表してから、こうなったらいいなと思えることはどのようなものか。
- ⑩次の授業までの目標は何か。

問題解決型学習は、課題の設定の良し悪しですべてがきまる。「～について」というテーマは、項目の羅列で終わる。「なぜ、どうして」と疑問形で考え始めたときから問題解決の構造

がつくられ、テーマを深めることができる。教師は、生徒がどのようにテーマを設定しようとしているかを見極め支援する。

GROW モデルの問いは、生徒の発想を具体的にするために有効である。これらの問いは、生徒の答えに応じて、2問目、3問目と質問を積み重ね、発想を目に浮かぶように話すことを期待する。

③の「不思議だな、なぜ? どうして? と疑問に思うことがあるか」④の「解決しなければならない問題では、何があるか」の問いは、とかく「～について」型の課題設定になりがちな発想を問題解決型の方向に向かうようにするためのものである。

この課題設定のところでは、⑧の問いのように「問題を解決して発表したとき、どんな成果が期待できるか」⑨「発表してから、こうなったらいいなと思えることはどのようなものか」などの質問は、わくわく感をイメージすることにより、授業を活性化する効果がある。

GROW モデルを簡潔に言えば、課題を達成したときの状況を明確に描き、現状とのギャップを把握する。そして、到達地点までをどのような方法で、何を使って進んでいくのか、選択肢を創造し、最適な方法に絞り実行計画をたてる支援である。

SMART モデル

SMART モデルは課題設定を明確にするステップで、GROW モデルの「ゴール」の取り組みで使う。課題の曖昧性をなくしどのような問題を解決するのかをはっきりさせる。また、だれでも考えられるゴールではなく、新しい発見を伴うストレッチした到達点を考え、それが授業としての目標に沿うものであることを確認し、期限を明確にした取り組みを目指す。

これらの項目は、調べ学習の進み具合や子ども状態に応じて活用する。

参照：S-SMART モデル（目標設定モデル）

(2) Reality (リアリティ)

現在の状況を明らかにする質問例

現在の状態を明らかにし、ゴールと現実とのギャップを認識するためのコーチングを行う。

- ①現在どのような状況か。
- ②いま取り組まなければならないことは何か。
- ③上手くいっていることは何か。
- ④やっていないことは何か。
- ⑤どのようなやり方で現状に至ったのか。
- ⑥その情報はどこから得たものか。
- ⑦これからの状況はどのように変化していきそうか。
- ⑧未解決のことは何か。
- ⑨課題解決のためにやらなければならないことは何か。
- ⑩どのような資料を手に入れたいか。

ここでの質問は、①現在の状況。③上手くいっていること。④やっていないこと。⑨課題解決のためにやらなければならないこと。⑩必要な資料、などを聞き出す。できるだけ客観的な情報を知る努力をする。評価は加えない。

(3) Resource (リソース)

課題を解決するために活用できる資源・方法を発見する質問例

現状が明らかになった時点で、Resource (リソース)：課題を解決するために使える資源を発見するための質問をする。

- ①どのような方法で学習を進めるのか。
- ②これを成し遂げるために、何を使ったらうまくいくと思うか。
- ③問題を解決するために援助してくれる可能性のあるのはだれか。
- ④そのことについて、一番詳しい人はだれか。
- ⑤どこに行けばいいのか。
- ⑥用意するものはないか。
- ⑦成功事例で、この問題にも応用できるものはあるか。

ここでは、どのような方法で、何を使ったら到達地点まで行くことができるのかを聞く。③「援助してくれる可能性のあるのはだれか」④「詳しい人はだれか」⑤「どこに行けばいいのか」などの質問を通して学習を進めていくための手がかりを考える。

(4) Option (オプション)

課題を達成するまでの道筋を複数考える。

- ①他にどんなやり方が考えられるか。
- ②最も得意な方法は何か。
- ③他の人がやっている方法で、取り入れられることはあるか。
- ④聞き手の視点で考えると、他に方法はないか。
- ⑤聞き手の立場に立ってみると、何を一番知りたいと思っているのだろうか。

課題を達成するために、問題解決の計画や方法をできるだけ多くの選択肢のなかから選ぶことがよりよい結果を生む。選択肢がこれ以外にないという状況は、まだ掘り下げが浅いと見ることができる。

(5) Will (ウィル)

選択肢のなかから最適なものを選び、実行計画を立て、それを実行する意志を確認する

- ①選択肢のなかで最も効果的だと思うものはどれか。
- ②優先順位をつけるとしたら、どれから取り組むか。
- ③すぐにでも始められることは何か。
- ④それはいつはじめるか。
- ⑤明確にやると決めているか。
- ⑥次の進捗状況の点検はいつにするか。
- ⑦これをやりとげたら、どんな気持ちになるか。

GROW モデル5番目の Will (ウィル) では、

①選択肢のなかで最も効果的だと思うものはどれか。②優先順位をつけるとしたら、どれから取り組むかなどの質問を通して決意の強さを見

る。

ここで、問題解決型学習ステップ2 (P-20) の「学習計画を立てる」段階で GROW モデルをどう使うかを説明する。このステップでは研究計画書を作成し見直しを立てる。研究計画書は下記のフォーマットを参考にする。

テーマ 問題解決型、疑問型で設定する。
テーマ設定理由 どのような問題を、なぜ解決するのか。
テーマについての予想 (仮説) 調べる前に自分なりの予想を書く。 調べながら、調べてわかったことと予想を照らし合わせることで、調べるエネルギーにつなげる。
調べる方法 図書館資料・インターネット・資料館・現地調査、アンケートなど、何を使ってどのように調べるのかを明らかにする。 二つ以上の方法で調べ、比較検討するように指導する。

この段階は、課題の設定をより詳しくするところである。特に、テーマ設定理由、テーマについての予想は、GROW モデル1-⑥「調べることによってどのようなことが明らかになるか」、⑧「問題を解決して発表したとき、どんな成果が期待できるか」の問いが研究計画書の作成に寄与することになる。

また、学習計画を立てるときに重要なのが、テーマを深め、仮説の根拠を明らかにするための方法を考えることである。この段階は、GROW モデル2のリアリティ、GROW モデル3のリソースの質問で深められる。

GROW モデル2リアリティ⑩では「どのような資料を手に入れたいか」を質問する。これは、調べる方法に入る前に把握しておく項目である。次に、GROW モデル3リソース①で、テーマを深め、設定した問題を解決するために、「どのような方法で調べを進めていくのか」

を考えさせる質問を行い、見通しをはっきりさせていく。

このあとの学習は、取り組みの経過をもとに「資料・情報の収集」から「資料・情報を記録し、整理する」「これをまとめ、発表する」というステップを踏む。

この経過のなかでは、試行錯誤を繰り返す生徒や思うように資料が集まらず学習の速度が落ちているグループなど濃淡がでてくる。

問題解決型学習における教師の支援は、一律ではない進捗状況の生徒たちそれぞれの状況を把握しながら、個々に柔軟に対応しなければならない。

GROW モデルの活用は、生徒が、5つの学習のステップのどこにいるのか、何に悩んでいるのかを把握した上で、その状況に合ったGROW モデルスキルを当てはめていく。

さらに、教師は生徒の状態によって、課題を深めるためのアドバイスをする。また生徒の言動が期待に沿ったものであれば、それを強化するためのフィードバック、逆に、期待に沿っていないものであれば、改善あるいは修正のためのフィードバックを試みる。前者は、強化のためのメッセージを送る。後者は言動を指摘し問題解決方法の選択肢を聞き、選択させ援助に入る。

4. 成果をあげた問題解決型学習とコーチングマインドとの関係を考察する

大分県立大分豊府中学校は、半年をかけて、調べ学習ポスターセッションに取り組んだ。テーマは「大分の先哲の生き方に学ぶ」である。この取り組みは、コーチングスキルとは別に、担当教師が作成した授業計画に基づいて実施し成果をあげた調べ学習である。

本稿で、コーチングによらない実践との関係を考察するのは、コーチングの理念である「相手が本人の望む方向に向かって、本人の納得するやり方で進んでいくことを援助する技術」という人材育成の考え方で組み立てられたコーチ

ングの手法が、授業実践に適合するのかどうかを検証する目的もある。

コーチングのねらいとする個々人の主体性を育む手法は、これからの教育には欠かせないものである。学力向上が大きな課題となっている現在、ペーパーテスト対策を優先した教師の一方的な指導だけでは成果をあげることができないという認識が広まりつつある。こうしたなかで、成果をあげている授業をみると、一方通行ではないさまざまな取り組みが行われている。今回の大分豊府中学校も、調べた「事実」と自分の「意見」を区別して、自分の考えや思いを「自分の言葉」で伝えることを大きな目標に掲げ実践を行っている。生徒の主体性を育て、活動を深める実践であることがわかる。このような取り組みのなかには、必ずコーチングの要素が含まれている。コーチングは決して特殊なものではなく、日常のコミュニケーションのなかにあるものを、人材育成の目的で体系化したものだからである。

このような理由から、教師の授業計画をもとに実施した調べ学習のなかに、コーチングの要素がどのくらいあるのかを観察することにより、学習支援に活用できるコーチングマインドの有効性を考察する。

今回の大分豊府中学校の実践観察資料は、別府大学が制作した教師対象のDVD教材「深め発見する喜び～言語力とメディア活用能力の向上を目指す教師の支援～」を使用する。

(1) 課題設定における教師の指導・支援をコーチングマインドを通して見る

教師は40人ほどの先哲の候補を生徒に提供し、自由に選ばせた。

二人から四人単位に3クラス36グループに分かれ、活動を始めた。夏休みには、先哲の関係者や施設を訪問したり、図書館に向き資料を収集してレポートを作成している。授業数は、15コマ、教師はワークシートをつくり、毎時間取り組み内容がわかるようにした。作成したレポート、収集した資料をもとに、ポスターの制

作に入る。調べた先哲の業績やエピソードをもとに、キャッチフレーズを考え、掲載する内容を絞り込みながら、ポスターの構成を行い完成させている。そのあと、ポスターセッションを行っている。

この過程を GROW モデルの組み立てを通してみると、GROW モデル 1 ゴール：課題設定での教師の指導・支援は、ポスターセッションを行うことを提示説明したあと、「大分の先哲の生き方に学ぶ」という大括りな課題の設定を行っている（指導）。その上で、社会科教師と連携し、先哲40人の情報を提供した（支援）。生徒はこのなかから調べたい先哲を選び自主的にグループを組んでいる。この段階では、先哲のだれを選んだらいいのか、教師とのやりとりを活発に行っている。同時にリアリティ：現状を把握した上で、どのような方法で調べを進めるのかについての検討を深めている（支援）。安易にインターネットで調べて終わるのではなく、現地に赴き関係者へのインタビューや資料収集、図書館等での調査活動につとめるよう指導し、教師も同行支援している。リソース、選択肢の創造は並行して行っており、しっかりした道筋をつけ活動を始めている。ウィルの強い意志を感じ取ることができる。

生徒との関わりはグループ単位となるが、話し合いに入ると、個々それぞれに考えを聞き、教師の考えも伝えアドバイスするなど、通り一遍ではない双方向の関係が構築できている（支援）。

また、毎時間の授業では、ねらいとやるべきことを質問形にしたワークシートをつくり示しているため、個々に対応しなくても、各自考えを深めることができる。例えば、その人の業績は？ どんどころに感銘を受けたのか。一番伝えたいことは何かを記述する枠もある（指導）。

GROW モデルのゴールのポイントをワークシートを通して行っているということが言える。

コーチングマインドでは、グループコーチに該当する。効果的な組み立てである。

(2) ポスター制作における支援とコーチングマインド～キャッチフレーズの創造～

教師の支援をみると、課題設定から発表までの取り組みの中で、生徒との関わりが最も深く影響を与えたのが、ポスターを制作する過程であった。そこで、田原淳グループと双葉山定次グループのポスター制作の場面をもとに、教師と生徒との話し合いのなかに、コーチングマインドの要素がどのくらい含まれているのかを考察する。

今回のポスターセッションの共通テーマは大分の先哲の生き方に学ぶである。

先哲を一言で表現することは、非常に難しい作業である。先哲の生い立ち、業績、生き方などの詳細を掴んでではじめて生み出されるものである。生徒の様子を観察しながら、田原淳と双葉山定次の二つのグループ内での話し合いを深める支援の実際を見る。

① 田原淳グループにおける支援

教師：どこをすごいと思った？

生徒：知らないこと、知りたいことを自力で、あきらめず、粘り強く、取り組んだ。根性で努力を惜しまなかった。研究のためなら身を投げ打つところ。自分が納得するまで頑張るところ。

教師：先生も調べただけど、ドイツに留学したとき挫折せんかった？

生徒：自分は何のためにドイツに来たのかという、自分を厳しく責めたと思う。ここであきらめて帰るのではなく、もうちょっと探してみようという粘り強さがあって発見できた。人との出会いと粘り強さがある。

教師：人との出会いは大きいということだね。アショフさんに出会わなかったらただのお医者さんだったのね。

人との出会いで何があったのだろう、どうして発見に繋がったのだろう。

生徒：うーん。熱意を受け取って、お互いが成長した。

教師：何があったのだろうか。

生徒：地道だった。

教師：何を地道にやったのだろうか。

生徒：細かい作業を何度も続けた。何万枚のレポートをまとめた。粘り強さがあった。

教師：何に粘り強かったのだろうか。そこに何があったのだろうか。

生徒：出会いと発見までの間がわからない…。

② 田原淳学習実践の中にあるコーチングマインドの要素

田原淳グループは、ペースメーカーの基礎理論を発見し、多くの人の命を救った偉大な医学者を、一言でどう言い表わしたらいいか苦慮している。また、発見に直接結びついたものは何なのか、発見に至る過程で何があったのかがなかなか掴めないでいる。

キャッチフレーズづくりは、コーチングではゴールに相当する。

田原淳を描く一言は、田原淳の具体的な研究活動とその成果とともに、発見までの先哲の生き方を言い表わすことになる。

ゴールは、答えであるキャッチフレーズを教えるのではなく、生徒自身が田原淳の生き方を明らかにできるように、発見に繋がった要因を聞き出す必要がある。いきなり教師から答えを出してしまうと生徒の自主性は育たず、思考は停止する。

教師は、「どこをすごいと思った？」という質問から始めている。コーチングの要素では、ゴールの明確化とともに、テーマである「先哲の生き方に学ぶ」の調べが具体的にどこまで進んだのか現状を把握するステップになる。生徒の答えを聞いた教師は、教師自身で調べた、ドイツ留学時代に田原が挫折したことを伝えている。コーチングでは、生徒の言動を強化するフィードバックに相当する。ここで生徒は、挫折を克服できた理由として、人との出会いをあげている。これに対し教師は同意を示している。この同意をコーチングでは、「承認する」「了承する」になり、肯定的ストロークとして多用されている。そのあと、「人との出会いで

何があったのか」「発見に繋がった理由は」と質問を重ねているが生徒は答えられない。

教師が発見までに何があったのかにこだわったのは、先哲のキャッチコピーを創造していく経過を見ると、各グループとも業績中心の紹介となっていたことだ。先哲の生き方を掘り下げるところまで行っていない。田原淳グループの場合も、ペースメーカーの基礎理論を発見したのは、人との出会いがあったからと間接的な理由で終わっている。

この段階で教師は、GROWモデルの課題設定にある疑問形で考えさせる手法と同じ「なぜ」を試みている。問題解決型の学習は、「なぜ」から「調べ」「解決する」、そして再び「なぜ」「調べ」「解決する」を繰り返すことによって、問題解決の条件が整うのである。

こうした支援で明らかになったのは、先哲の生き方を知る手がかりとなる資料が足りないこと、また、かりに資料を手に入れたとしても、かなり専門的な分野となり、中2としては難しくなることが予想される。しかし、教師は、先哲の生き方を課題とする以上、どこまで先哲に近づけるか、チャレンジさせる必要があると考えたのである。コーチングでも、目標への到達度を、常識的レベルの内容とするのではなく、ストレッチした到達点を目指す支援が有効であるとしている。

③ 双葉山定次グループにおける支援

このグループもキャッチコピーが浮かばず混乱している。

生徒：これと言ってキャッチコピーがないんですよ。

教師：一般の人は69連勝しているからすごいと言う。そこじゃないよね。(言いたいことは)

心に残っていることは？

生徒：いまの相撲と違う。足腰の力強さが一番出ていた。小さいときから、まわりに動じないで貫き通す。自分が勝つという精神を持って頑張った。心技体でなく、心

気体で自分の内面を強めようと頑張っていた。

ハンデがあってもそれを出さないでやって69連勝した。

教師：心気体の気はいい。心技体はみな知っているから、心気体と言うと、聞く人は間違っていると思う。その時に、これには意味があるんですよって言える。

心気体はポスターに載せたらいいね。キーワードはある。

この人のすごさを自分たちの生き方に生かしていく。壁にぶち当たったときに、双葉山さんはこんな考え方をしよった。私もこうやってみよう。参考にできるものをメインにすればいい。見習いたいところ、見習ってほしいところを考えてほしい。

④ 双葉山定次学習実践のなかにあるコーチングマインドの要素

冒頭「これといってキャッチコピーがない」という生徒の訴えに対し教師は、「言いたいことは69連勝ではないよね」と投げかけている。双葉山の69連勝についてはどの資料にもあり多くの人が知っていることなので、それ以外のテーマを探す動機付けをしている。そして、「心に残ったことは何か」と聞いている。この一つの問いで、生徒は、69連勝できた双葉山の姿勢を具体的にことばにすることができている。心技体ではなく、心気体というキーワードもでてくる。これに教師は共感を示し、ポスターへの掲載を提案している。コーチングに当てはめるとこのような受け止めは生徒の意欲を高める支援として有効である。先生に高く評価されたという実感を抱く。また双葉山の生き方をとらえ自分に当てはめて考えるようにとメッセージを送っている。

コーチングでも、生徒の状況によっては、新しい行動を取ることを、直接、要求するスキルがある。自分の持っている能力や資源を最大限使っていくように導く。教師の支援とコーチングマインドとの共通点を随所に確認することが

できる実践である。

⑤ 支援を通して培われる主体性と言語力

この段階で教師は、再調査を指示し、先哲の生き方、それを自分自身に当てはめて考える時間を設けた。これからの取り組みをコーチングのGROWモデルに当てはめてみると、ここで生徒は、調べを深めるためのリソースを考えることになる。力になること、例えば、先哲に詳しい先生や地元の関係者、あるいは、先哲の研究者などの活用を再度検討しはじめる。コーチングで導く内容を、生徒自ら主体的に取り組んでいる様子が伺える。

再調査に入ってから支援は、グループごとに行われた。支援の内容は、ワークシートの問いを生徒に直接向けることで、ゴールで何を描くのかを明確にしている。「どこをすごいと思った?」「その人のどんなところ(生き方、考え方)に感銘をうけたのか」「一番伝えたいことは何か」の問いは、先哲の生き方として象徴的なキャッチフレーズを導くための共通の問いである。さらにゴールのイメージの裏付けを調べていく手がかりを考えさせるために「人との出会いで何があったのだろうか」「どうして発見に繋がったのだろうか」という質問を重ねている。コーチングスキルの応用とも言える。

田原淳グループはまもなく、田原が撮り続けた心臓の写真を手に入れ、発見までの経過を追っていく。

この段階での活動全体の動きに対するコーチングマインドによる支援を想定すると、ゴールまでの道筋が描けないグループに対しては、現状を把握する。どのようなやり方で現状に至ったのか。うまくいっていること、やっていないことは何かなどの質問をする。現在ある資料とゴールとのギャップに気付かせるうえで効果がある。そして、先哲の生き方を知るための資源発掘、選択肢の創造を行いゴールに向う支援を行う。その場合、勇気づけや励まし、支持する、連帯感をつくるメッセージを相手の状

況に応じて伝えるなどの支援を試み、生徒のモチベーションを高めていく。

このように、コーチングマインドを当てはめて、実践活動を見ると、課題設定から意志確認までのGROWモデルのステップが、繰り返されていることがわかる。教師は学習初期に設定した課題の到達点、そこで止まるのではなく、学習の節目のところで、再度、ゴールにもどって考えを深めることができるように質問している。そしてグループのメンバーそれぞれが自分自身に問うことで、テーマを掘り下げている。

大分豊府中学校の制作過程での指導・支援の様子をみると、教師はグループワークが活発になるように学習環境を整えている。インターネットの書き写しではなく、現地に出向いて直接関係者に会って話を聞くようにと指導するかたわら、直接現地との交渉に当たるという支援を行っている。また、レポートの作成を義務づけることにより、生徒一人ひとりが情報を記録整理しまとめる作業を行っている。確かな話し合いの土壌を作り上げ、グループワークでは教師も話し合いに参加している。

このような指導・支援の組み合わせが学習効果をあげることに結びついている。

コーチングマインドで行う場合にも、こうした教師の指導・支援がなければならない。単なる質問のスキルを技術的に使うだけでは、効果をあげることはできない。問題解決を図るエネルギーは、生徒も教師も同レベルでなければならない。

制作しているポスターでは、先哲を一言で表す推敲を重ねたキャッチフレーズとともに、その根拠を示し、先哲の生き方が伝わるようにする。そして発表では、このポスターをもとに、自分のこれからに生かしたいことを明らかにする。

この段階になると、教師に相談して仕上げた文言ではなく、これまでの支援で培われた確か

な主体性のもとで生み出されたことばになる。ポスターに付記したコメントは、“自分のこれからに何を生かすのか”を最終の発表で伝えたものである。

田原 淳

田原淳 ~命の救世主~

田原淳は幼い頃から頭がよく、東大卒業後、ドイツへ留学しますが、やがて「自分は何のためにここにきたのか？」という疑問にぶつかります。そんな時、彼を変えた事とは…!!?

<年表>

明治 6 年	大分県東国東に生まれる。	田原を救ったのは、悩みを分かち合ってくれる人との出会いでした。小久保氏です。そして、田原は小久保氏の紹介で、アショフ氏と巡り合います。
明治 25 年	田原家に養子に出される。	
明治 34 年	東京帝国大学(現:東京大学)医科大学卒業。	田原は、アショフ氏のもと、同僚の応援や家族の存在に支えられながら、新しい心臓医学の研究に着手します。
明治 36 年	最先端の医療を目指し、ドイツへ。	そして田原は、とうとう「田原結節」という、ペースメーカーの基礎となる心臓の結節を発見します!
明治 39 年	心臓刺激伝導系を発見、発表。	
昭和 27 年	田原淳、眠るように他界…。	ペースメーカーの父

命の救世主

田原淳は、何度も挫折を繰り返しながらもこんなに大きな発見を出来たのは、人との出会い、人々の支えがあったからだと思います。

私たちはこんな田原淳の尊敬すべきところ、やはり回りの支えてくれる人を大切にすること、自身の努力を惜しまないところだと思います。そんな田原淳を私たちは見習いたいと思いました。

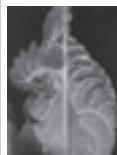
(田原淳グループは、発表のあとの質問のなかで、田原淳が撮り続けた心臓の写真を示し発見までの試行錯誤の経過を説明している)

双葉山 定次

気の極意～双葉山～

双葉山ってどんな人？

不滅の69連勝を記録した、大分県唯一の横綱である。晩年は時津風理事長として活躍した



木鷄もつけい

ワレイマダニモツケイニアラズ

この言葉は、連勝がストツときによき理解者であった、者の竹葉秀雄氏に送った電報です。双葉山は様な徳が充実した姿で相撲をしていたが連勝アップしたことにより双葉山の目指していたそれに届きませんでした。



心・気・体

通常、スポーツをする上では、心・技・体が有名ですが、双葉山は技を極めていくのではなく、気を極める。つまり、内面から強くして、相撲を取っていきました。そうして、双葉山は69連勝という歴史的な快挙を成し遂げました。

僕たちは双葉山を調べて何事にも一生懸命にこつこつと努力することと、どんなに完璧にやっても、まだ満足できない、ハングリー精神の二つのことを学びました。双葉山はこの努力、ハングリー精神ということに頑張ったから、いまの69連勝という大記録があるのではないのでしょうか。自分たちはこれから双葉山のこの努力、ハングリー精神、ということを目指して頑張っていきたいと思います。

VI. 言語力の育成と教師の支援のあり方

ポスターセッションを通して、問題解決型学習における教師の支援のあり方をコーチングマインドとの関係でみてきたが、ここで新学習指導要領の指針として取り上げられている言語力の育成を、国語科と他教科との関連でみていきたい。新指導要領の考え方として、言語力の育成は、国語科が枠を作り、他の教科はそれを実

行するという位置におかれたと言える。つまり国語科だけのものではなく、理科や社会、算数・数学などの課題にもなったのである。

こうした状況下で教師はどのような支援を考えたらいいのだろうか。残された課題は何かを考えていく。

まず、子どもたちの主体性との関係で支援をどのように考えるかについて、甲斐陸朗氏（元国立国語研究所長）は、「これからは、学習者の主体性を大切にする教育が期待されると思う。高度成長期には、とにかく叩きこみ、世界に追いつけという形で知識を注入される。いまは不透明な時代で、五年後の日本がどうなっているかはだれも予測がつかないような時代になっている。そういう状況の中で子どもたちには、生き抜くための力を我々は教育として与えていかなければならない。それは『自分で考える、自分で問題を見つける、見つけた問題を、自分の力で解決する。解決したことを他の人にも説明できる。そして質問にも応じられる』という力である。これは、教師から言えば、注入とか指示・強制ということではなく、支援ということしかない。自分でどういう問題を見つけていくかが何よりも大切だ。仮にその課題を教え込んでしまったら、学習者は受身になってしまって、主体的な行動がとれなくなる。それが今まで3年ごとに行われている OECD の PISA の読解力の解答傾向にある。日本は残念なことだが、白紙解答が世界で指折りのところにある。なぜ日本の生徒に白紙が多いかと言うと、これは知識の注入主義の結果であると言える。その問題文は、毎年実施され始めた全国学力調査の国語の問題と同じく、難しい問題はない。誰でもできるものだが、自分で考えないとできない問題がそこに提示されている。そこで、そういう問題の類型を教室で提示して、子どもたちが迷っている場合は、その根拠をいろいろ話し合うような形で検討を加えさせるような授業が良いと思う。」と話している。

では、主体性を持たせるために、どこまで指導し、どのように支援したらいいのか、この指

導と支援との関係について、鵜田道雄氏(元千葉県袖ヶ浦市立根形小学校教頭、現袖ヶ浦市教育委員会学校教育課主幹)は、「どこまで教え、どこまで待つか、難しい問題だ。指導と支援、いろいろな言葉があるが、私は調べ学習をやっている、課題にしても、課題に対する結果にしても、これを教師が知識の部分で示してしまつたら、どうしようもないと思う。子どもたちの前に立つ指導者として失格ではないかと思う。課題を自分で持つようにするための方法を教えていくことは、いくらでもできる。

そして、設定した課題に対して、一つの結論を導き出すために、どういう道筋があるかということを示すことも、教師にとっていくらでもやれる。その部分を支援と考えたい。」

さらに新学習指導要領との関連について鵜田道雄氏は「調べ学習の学習過程を通すことで、自ら課題を解決でき、自分の考えを人の前で自信を持って言える、そういう子どもたちを育てることに必ず繋がってくる。

新しい学習指導要領が発表され、基礎・基本となる習得型の学力をしっかり身につけなさいということも大切なことです。ただ、もう一つ、調べ学習は活用型や探求型の学力にも関わってくる。国語科であるとか、総合学習の時間で行えばいいというものではなく、やることは、理科の時間、あるいは社会科の時間に、実験や観察をしながら、あるいは、社会科の調査活動をしながら、課題を設定し、予想し、自分で調べ、そしてまとめ、発表し、考察していくという学習過程そのものだと思う。いま言われている言語力の育成は、全教科、領域を含め、学校教育活動全体で行っていくんだととらえ、学校のカリキュラム全体を結びつけていく。その辺が大事なのではないかと感じている。」

言語力の育成が全教科の課題となった。しかし、各地で行われる調べ学習の発表に接して思うのは、どちらかという、写したものを読んでいるケースが多い。自分のことばまでには、まだ距離がある。子どもの主体性を育み、言語力の向上を目指す取り組みは、国語科に預

けておくのではなく、すべての教科との関連で行い、実効あるものにしていかなければならない。本稿で提起したコーチングマインドによる問題解決型学習への支援の方法は、「教える」から「受け止める」への教育の転換であるとも言える。いま、子どもの学力向上が叫ばれているが、考える力の育成をないがしろにする限り、本来の学力向上には結びつかない。

主体性を培い、言語活動能力を育成するためには、問題を解決していく学習と合わせて論理表現の習得が大きな比重を占める。相手の立場に立ってわかりやすい表現を考える他者意識の有無が言語能力を決めていく。

自分ひとりではなく、他者との関係を意識した思考力を身につけるためには、自分の考えを受け止め、発想を伸ばしてくれる人、ことばが浮かばないときに、一緒に考えてもらえる人の存在が必要になる。その役割を担うのが指導と支援の発想を合わせもった教師である。

Ⅶ. 問題解決型学習におけるコーチングマインドによる支援の有効性

考察の結果として言えることは、大分豊府中学校の教師の実践とコーチングマインドとが見事に結びついていることが確認できる。活動を進める教師の思考が、コーチングの組み立てに当てはまる。さらに、教師独自の進め方のなかに、コーチングとしても参考にできる内容もある。例えば、事前にワークシートを配布し、授業の内容を深めるための質問に記述で答える手順がある。個々にコーチするのではなく、全員同時に考えさせている。これは、そのあとのグループワークにおけるコーチングをより効果的にする。このような、コーチングと教師が計画した指導と組み合わせた支援も視野に入ってくる。

さらに、実践の全体の流れにコーチング理論を当てはめて考察すると、各段階で行う教師の支援によって、生徒の活動がより自主的になってくる、そのことによって、生徒自身が自らをコントロールするセルフコーチングの構造が培

われてきていると分析することができる。コーチングの究極の目標は、セルフコーチングができる人材を育成することにある。コーチが関与しなくても、目標に向かって確実な歩みをする状況を理想とする。今回はこれに近い状態がポスターを完成させる経過の中で生まれてきたのではないかと推測する。このような自主性を生みだしたのは、教師が半年の取り組みのなかでしっかりした学習環境をつくりあげる支援があったからである。学習の目標と、到達点までの方法を熟慮させ、現状と到達点のギャップを埋めていく支援と各段階での的確な教師の指導が主体性の構築に結びついている。成果をあげる構造は、コーチングマインドの組み立てと一致することが裏付けられたと言える。

コーチングを教育のなかに取り入れたい理由は、コーチングのスキルに、相手から話を聞き出すことを通して、相手のモチベーションを高めていくコミュニケーション法があること。しかも、その構造が体系化されていて、だれにでも活用できるからである。また、今回の考察で明らかになったように、コーチングマインドの要素は、日常の教育のなか存在しているものであり、コーチングの導入が、従来の教育の変更をとまなうものではなく、支援の方法をより充実させる効果を生むことにある。

コーチングの基本的な考え方である、肯定的なストロークによる支援は、子どもの心をとらえる。信頼関係が芽生え、教師との会話がはずむ。GROWモデルのスキルの構造は、学習の精度を高め、子どもの主体性を構築し、言語力を育む。

このようなことから、コーチングのスキルを授業のなかに取り込み、新しい支援の方法として開発し、その手法を共有する価値がある。

本稿では、コーチングを問題解決型学習にあてはめて考察したが、教育現場では、進学や就職等節目を迎えた段階での支援に効果を発揮する。いまコーチングの対象年齢はビジネスマンから、学生、生徒、児童へと広がりを見せている。それだけ社会生活のなかでさまざまな問題

が発生し、その解決のためにコーチングマインドの関わりが求められているのである。

言語活動能力を育てる学習環境は、本稿で示した論理表現の育成から、問題を解決する能力育成までを体系的に行う全教科あげての対応があって実現する。そのためには、小・中・高・そして大学のそれぞれの教育機関で、確かな指導支援のできる教師を養成していくことなくしては新しい学習指導要領の期待に応えることはできない。

子どもの主体性を支援し、子どもと共に歩む優れた指導者がいる学習環境があってはじめて、子どもの意欲が高まり、考える力、表現する力、創造する力が生まれ、その結果として、地についた学力の向上を実現させることができるものと確信する。

参考文献

深め発見する喜び DVD/解説書

制作：別府大学

① 教員の指導力を拓く調べ学習

発行：平成19年3月31日

② 言語力とメディア活用能力の向上を目指す教師の支援

発行：平成20年3月31日発行

学びの力を育てよう

著者：鶴田 道雄

発行：株式会社ポプラ社

平成5年3月

ビジネス・コーチング

著者：田近 秀敏

発行：PHP 研究所

平成15年9月26日

PHP 研究所認定ビジネスコーチ講習資料